みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

3000年ぶりの神殿間の交流 (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5536

巻頭エッセイ

3000年ぶりの神殿間の交流

関　雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）

パコパンパ村の祭りが終わり、村に静寂が戻ってきたころ、クントゥル・ワシ遺跡博物館を運営する農民たちがやってきた。旧友と再会するかのような懐かしさを感じながら抱擁し、再会を喜んだ。クントゥル・ワシ遺跡博物館を支援する日本の組織「稀有の会」の資金で実現した行事である。

クントゥル・ワシ遺跡で大貫良夫東大名誉教授が率いる日本調査団が金製品を副葬した墓を発見したのが1989年、今から23年前にさかのぼる。とくに金製品の帰属をめぐって繰り広げられたためまぐるしい経緯についてはNHKのドキュメンタリー番組「アンデス黄金騒動記」（1996年）でも取り上げられたことがある。遺跡のふもとにある村、村が帰属する郡都サン・パブロ町、文化庁支部の置かれたカハマルカ県都カハマルカ市、そして首都リマに代表される国、というさまざまなレベルで帰属が取りざたされる中、日本調査団は村に遺跡博物館を建設し、将来的に出土遺物を保管するということで、村人と合意をみた。博物館建設のための資金は、日本で開催する展覧会における募金や協賛金を充てることにした。もちろんやや無謀な計画であった。通常、日本の展覧会場は2年前くらいから押さえておかねばならず、まったく当てもなく、一時輸出申請を行うことは通常許されない。それでも、手続きに1年あまりかかったこともあり、展覧会場探しはなんとかクリアーできた。私たちの趣旨に賛同した自治体、企業、私立博物館が会場を12か所ほど提供してくれたのである。

こうして資金の目途がついた1993年、起工式がクントゥル・ワシの村で催され、翌年10月には、博物館がオープンした。工事と並行して、村人の有志でクントゥル・ワシ文化協会（以下文化協会）というNGOが結成され、私たち日本人は顧問として運営にアドバイスすることになった。以来、18年もの間、文化協会員は博物館を運営し、彼らの宝物を保管し続けたのである。普段は農民として畑を耕しながら、交替で博物館を運営するというアンデス地域で初めての事例となった。こうした活動を知った政府関係団体は上下水道の敷設を決め、やがて電気も通じるようになった。インフラ整備をまず行うことが当たり前の開発事業で、文化施設を先に造り上げることで、逆にインフラを呼び込んだ珍しいケースとして国際機関も調査したほどである。

その文化協会の会員が、パコパンパ村にやってきたのである。村にあるパコパンパ遺跡はクントゥル・ワシ遺跡と並ぶ北部山地屈指の神殿である。紀元前1200年頃から紀元前500年ころまで、クントゥル・ワシ遺跡とほぼ同時代に栄えたことがわかっている。ひょっとしたら神殿を率いたリーダーや神官同士で交流があったかもしれない。その意味で、両者を比較することの学術的意味は大きく、また3000年ぶりの交流というのも話としてはおもしろい。おそらく文化協会員にとっても、自らが守っている遺跡が、どのような文化的意味をもっているのかを考えるいい機会となったはずである。実際に、環境や神殿の形など両村、両遺跡の比較を踏まえた発言が多かった。

もう一つ、私が彼らに期待したことがあった。それは、文化協会員自身の口からパコパンパ村の人々に博物館運営の経験を語ることである。じつは、パコパンパ村でもクントゥル・ワシ村で18年前に起きた出来事と同じようなことが繰り返されようとしているからだ。2009年、パコパンパ遺跡で金製品をともなう墓が発見され、私たちは「パコパンパ貴婦人の墓」と名付けた（『チャスキ』40号参照）。この発見以来、村人たちは博物館建設を要望するようになっていたのである。もちろんクントゥル・ワシでの出来事を体験してきた私には想定内の事態ではあったが、どのような博物館にするのかについては、まだまだ検討の余地があるとにらんでいた。そこで、文化協会の人々に直接、その苦労、あるいは喜びを語ってもらい、将来の博物館を考えるときの参考にしてもらいたかったのである。

村役場で開催された講演会で、文化協会員らは堂々と自らの体験を交替で披露した。給与も支給されず、ボランティアで運営することの難しさがある一方で、運営を通じて、村人の結集力が高まったことにも言及してくれた。いわば文化活動を通じて、地域のアイデンティティが高まり、政治的エンパワーメントが図られたということになろうか。これにはパコパンパ村の住民も刺激されたようだ。後日、私の帰国前に開かれた村会議では、クントゥル・ワシ型の博物館が欲しいという発言が目立った。しかし結論を出すのはまだ早いと考えている。かつて各地に築かれた神殿が、外見は似てはいても、それぞれ独自の特徴をもっていたように、パコパンパにはパコパンパに適した博物館のあり方があるだろうと思うからだ。社会組織を含めた諸条件を考慮した上での開発でない限り、箱物建設の押しつけになってしまう。

文化協会員の講演の後、パコパンパ村の人々は、いつもの会合のようにカニャッソと呼ばれるサトウキビの蒸留酒で一行の労をねぎらおうとした。相当強い焼酎をストレートで回し飲みするこの習慣は、私にとってもやっかいである。それ以上につらかったのは、酒を禁じるプロテスタントが多いクントゥル・ワシ村の人々であったろう。なんとか口実を作って、酒から逃れようとしていた姿が多少滑稽であった。こんなことは3000年前には起きなかったであろうと思いつつ、素敵な交流だとしみじみと感じた。